

定信紀行

第八話

花鳥画のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司



▲花鳥図（江戸東京博物館蔵）

大きく湾曲した松の幹に止まるつがいの綬帯鳥が真下の急流を見つめている。樹間から赤白斑の花を咲かせる椿、その背後には青空と雲が描かれている。濃厚な色彩に彩られた花鳥画の名品である。

実は本作品は、20代半ばの松平定信によって描かれたものである。大名の余技とは思えないほど確かな技量で描かれた花鳥画である。定信は江戸絵画の中でも「南蘋派」（長崎派）の画人として名を売った人物でもあった。

生家である田安家において幼少より狩野派の画風を学び、後には田安家臣の源鸞卿から中国清の画人沈南蘋の画法を学んでいる。祖父の8代將軍吉宗が沈南蘋を長崎に招聘したことにより、中国の写生的

花鳥画が日本に伝わり、江戸時代中後期の絵画界に大きな影響を与えた。定信をはじめ、伊勢長島藩主増山雪斎、姫路藩主酒井忠以などの大名のほか、円山応挙・伊藤若冲・与謝蕪村などにも多大なる影響を与えている。

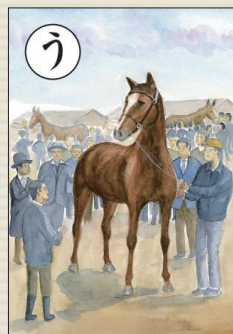
しかし、定信の画事は老中就任とともに終焉を迎え、絵画観を一変させている。その著書において絵画の果たす役割として、写真や記録としての実利性が重要であると述べている。老中退任後に定信が行った『集古十種』『古画類聚』『小峰城御櫓絵図』などの編纂事業は、まさに定信の絵画観の実践であり、文化財などの記録保存でもあった。

問 観光課 ☎ 55526

白河かるた 札でつながる今・昔



六枚目「馬市」



馬の生産地といえば北海道が有名ですが、かつては福島県も一大産地でした。白河周辺の地域では採草地として土地利用が行われていたこともあり、良質の馬が数多く生産され、江戸時代には藩が保護政策をとるほどであったと言われています。

また、1897年に軍馬の供給を目的とする「軍馬補充部」が、西郷村に設置されたことも馬産振興に影響を及ぼしたとされています。馬市での取引量は、大正期から昭和初期には1万頭を超え、地域経済に大きく貢献しました。

しかし、1950年代に入ると、自動車の普及や農業の機械化により馬の需要は減少し、馬市は1964年に終焉を迎えます。

日本三大馬市の一つと謳われたまちの喧騒も、今では遠い記憶となっていました。かつて白河の秋には、馬の嘶きと馬喰節が響いていました。

馬市とは、売り馬喰と買い馬喰が直接交渉して馬の取引をするもので、9月下旬に開催されました。

1876年には、明治天皇の東北・北海道巡幸に際し、小峰城跡で「天覧産馬」が開催されています。

問 まちづくり推進課

☎ 55533

お知らせ

ラウンジ

りばらん

子育て情報

保健情報

くらしの情報館

定信紀行

白河かるた

休日当番医・無料相談ほか

市長の手控え帖